

# アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館 ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



東城鉦太郎（慶応元年―昭和四年／一八六五―一九一九）  
《山家の春》  
キャンヴァス、油彩  
四〇・五×六〇・五cm  
明治四三年（一九一〇）

山間の村に訪れた早春の風景を描く。遠景の雄大な山並から中景の丘陵を経て近景の人家に至るまで実在感のある堅実な空間把握がなされている。細部に着目すればかなりの略筆であるが、安定した構図によって説得力のある画面となっているといえよう。また、抑制の効いた色彩表現は、冷涼な山村に訪れた春の空気感を現実に表現している。

東城鉦太郎は川村清雄門下。明治美術会、巴会で活躍したほか、日露戦争の海戦図やパノラマ館の絵画などを手がけたことでも知られる。とくに日本海海戦時の三笠艦橋を描いた図は著名。歴史教科書の挿図としてもよく用いられたため、東城を知らなくともその絵は見知っているという方も多からう。

（上席学芸員 村上 敬）

No.  
**129**  
2018年度 | 春 |

# 美術館の壁の向こう側について

館長 木下直之

去る二月十九日に開かれたボラン  
ティア交流会で、「美術館はどこか  
ら来て、どこへ行くのか」と題して  
話をしました。

このふたつは難問です。どちらが  
より難しいかといえ、もちろん未  
来を語らねばならない後者でしょ  
う。過去を振り返る前者にはまだし  
も手掛かりがあります。これまでに  
歩んできた道をたどり、現在地を確  
認することで、はじめて今後の指針  
を得られる。温故知新ですね。

交流会では、明治時代から絵がど  
のように展示されてきたのかを駆け  
足で振り返りました。それは壁が直  
立し、展示室が密閉される歴史でも  
あるのですが、当館の展示室に目を  
向ければ、可動式の壁と床との間  
は十センチメートルほどの隙間があ  
り、それがまだまだ気になります。

私が新米学芸員だった四十年ほど  
前には、小さな穴がたくさん空いた  
パネルをポールにわたして、その穴  
にフックをかけて絵を吊るすことさ  
えありました。反対側にも絵を掛け  
たから、向こう側にいる人の足がパ  
ネルの下から見えました。

当時の日本の台所で、同じく穴の  
空いたパネルに玉杓子やフライ返し  
や味噌濾しなどをひっかけていた光  
景をつい思い出してしまいます。ほ  
んの少し前まで、美術館の展示は手  
探り、手づくりだったのです。

この展示室をさらに堅牢な壁が取  
り囲んでいます。本誌前号で、美術  
館とSNSの関わりを指して、「美術  
館の堅牢な壁がゆらぎはじめたの  
ではないか」と書きました。美術館と  
いう制度や設備が出来上がるにつれ  
て（同じく日本の台所も様変わりし

て）、開かれた美術館（対面型や明る  
いキッチン）であることが求められ  
たことを考えれば、SNSによつて  
思わぬ人との間に関係が生まれる現  
状は好ましいことかもしれません。

あらためてSNSとは何か。social  
networking serviceの略語で、web  
上での社会的ネットワークのことで  
すが、問題はそこに形成された「社  
会」がどのようなものかですね。匿  
名のまま人がつながることの弊害も  
いろいろ指摘されています。

さて、今回のタイトルは「美術館  
の壁の向こう側について」としまし  
た。美術館に属していると考える人  
にとつて、「壁の向こう側」は外側  
です。逆に考える人にとつては内側  
ということになります。では、ボラ  
ンティアはどちら側に属しているの  
か、と問うまでもなく、その両側を

行き来している人たちです。

先日の交流会では、ひとりのボラ  
ンティアから「美術館の一員として」  
という言葉が発せられ、それがとて  
も自然に聞こえ、当館でのボランテ  
ィア活動の蓄積を教えられました。

私が兵庫県立近代美術館の学芸員  
になったころには、「ボランティア」  
などという言葉はほとんど使われて  
いませんでした。やがて生涯教育（の  
ちに生涯学習）の波に乗ってボラン  
ティアが登場した時（一九八七年十  
二月に養成講座開始）、同館にはこ  
の方々を受け入れる部屋がなかつた  
ことを昨日のことのように思い出し  
ます。

これよりもはるかに早く、当館は  
一九八五年八月にボランティアを募  
集し、翌年四月の開館と同時に活動  
を開始しました。こうしたリアルな  
人々とのネットワークをさらに確か  
なものにしつつ、「壁の向こう側」  
に新たに登場した無数の見えない  
人々とのネットワークが、美術館の  
未来にとつて大切なものとなりそ  
うです。



# 美を旅する

## ―静岡県立美術館のコレクションとともに―

土森 智典

公益財団法人上原美術館 主任学芸員

上原美術館は下田の市街より北西へ九キロほど離れた里山にありま  
す。二つの建物が並ぶこの美術館は  
昨年十一月三日にリニューアル・オ  
ープンを迎えました。

上原コレクションには、近代絵画  
と仏教美術の二つの柱があります。  
近代絵画は、大正製薬名誉会長をつ  
とめる上原昭二（一九二七年〜）が  
蒐集したコレクションがもとになっ  
ています。それらは家に飾るもので  
あったため、落ち着いた穏やかな小  
品が多いのが特徴です。仏教美術は  
その両親の寄贈によるコレクション  
にはじまり、平安時代の仏像、写経  
などを所蔵しています。

もともと上原近代美術館（二〇〇  
〇年〜）と上原仏教美術館（一九八  
三年〜）の二つがありました。昨  
年のリニューアルを機に一つにな  
り、「上原美術館（近代館・仏教館）」  
として生まれ変わりました。

リニューアルの大きな目的は、仏  
教館を国宝や重要文化財が展示・保  
存できる施設にすることでした。お  
よそ二年の工事期間中に大部分を建  
て直し、内装は全て改修しました。  
特に照明は最新のLED照明を用い  
ながら仏像が自然に見えるよう工夫  
を凝らしています。照明・建築デザ  
イナーたちと作り上げた空間は、お  
そらく他館では見ることがないもの  
です。

そしてこの度、リニューアル記念  
展の第二弾として、『美を旅する―  
静岡県立美術館のコレクションとと  
もに―』（二〇一八年四月一四日〜  
五月二〇日 会期中無休）を開催す  
ることとなりました。この展覧会は  
両館のコレクションを仏教館と近代  
館で展示し、その美しい世界を旅す  
るように巡るといふものです。

新しい仏教館には、『富士三保松  
原図屏風』《静岡県立美術館、以下S》

や『大日如来坐像』（上原美術館、  
以下U）のほか、モネが富士山に見  
立てて描いた『雪中の家とコルサー  
ス山』（U）など、伊豆や富士にま  
つわる作品が並びます。その正面に  
はモーリス・ルイスの大きな抽象画  
『ベス・アイン』（S）が時空を超え  
た空間を演出します。

さらに近代館ではゴーギャン『家  
畜番の少女』（S）やモネ『ルーア  
ンのセヌヌ川』（S）、『藁ぶき屋根  
の家』（U）、

ルノワール  
『アルジャ  
ントウイユ  
の橋』（U）  
などの風景  
画が広が  
り、部屋の  
中央にはロ  
ダン『永遠  
の休息の

の休息の



ポール・ゴーギャン《家畜番の少女》1889年 静岡県立美術館蔵



クロード・モネ《藁ぶき屋根の家》1879年 上原美術館蔵

精』のトルソ（S）が佇みます。奥  
の部屋では須田国太郎とレンブラン  
ト、古筆亀山切とルドン、平安仏と  
近代絵画が並び、時代を超えて内な  
る旅へといざないます。

上原美術館は個人コレクションが  
もととなつているため、ジャンルを  
超えた美へのまなざしの特徴になっ  
ています。静岡県立美術館の名画が  
上原コレクションと出あうことで生  
まれる新しい美の世界をお楽しみい  
ただければ幸いです。

会期中には伊豆・下田で両館によ  
る共同イベントを多数開催予定で  
す。新緑がまぶしい下田への旅、そ  
してジャンルを超えた美しい世界へ  
の旅にどうぞお出かけください。

# 作品との距離を近づける教育普及活動

当館前主査 石津 宏直

ちよこつと体験「シルクスクリーン」は、スタッフが製版をした当館のコレクション作品の中から好きな図柄を選び、ガーゼハンカチに刷ってもらう平成二十三年から毎年恒例となっているワークショップです。昨年度も「アートのなぞなぞ―高橋コレクション展」の期間にエントランスで五日間開催し、四二六名の方に参加していただきました。

ちよこつと体験は参加無料・予約不要・短時間で、小さい子からお年寄りまで誰でもできる気軽に参加できる内容を心がけて企画しているのです。幼児もたくさん参加してくれ、有名人ロダンの《考える人》や動物モチーフで子ども受けしそうな《樹花鳥獣図屏風》の白象・鳳凰などがある中、意外と子どもも人気が高いのが《地獄の門》の図柄です。大人の感覚では子ども向きでないように思える《地獄の門》図柄を小さ

い子に選んでもらうと、「給食前の手洗いなどで《地獄の門》ハンカチを取り出し、手を拭くような素敵な子どもがまた一人増えたな」と、ちよつと楽しい気持ちになります。

きつと、小さな子本人は《地獄の門》が何なのかわかってないことが多いと思います。もしかしたら「地獄」とも知らないかもしれません。なぜかその時の気分で選んでしまった《地獄の門》の図柄ですが、自分



《地獄の門》ハンカチ

の手で刷った一点物のハンカチは特別なものとなったはずですが。最初は「数種類の図柄の中の一つ」だった《地獄の門》が、今回のワークショップ体験をきっかけに、後に「幼い頃に使っていたハンカチについていた図柄」という自分と距離の近い作品に変化するわけです。参加をしたことで感じた楽しい気持ちやそのハンカチと過ごした時間が、大人になつてからの作品に対する疑問をもつ原動力になるのだと思います。

自分と関わりのないものには、興味をもてなくて当然です。出張授業などで県立美術館の紹介をするときには、「県立美術館のコレクションには、県民みんなのもので、わたしの物でもあるし、あなたの物でもあるわけです。」と説明をします。当然と言えば当然のことなのですが、学校の先生や生徒からは「そんな風に考えたことはなかった」という反



ちよこつと体験「シルクスクリーン」

応もよくあります。静岡県立美術館のコレクションを自分と関わりのある身近なものだと感じてもらうことは、とても大切なことです。

県立美術館が開館して三十二年経ちますが、開館初年度から当館実技室では様々な方法で教育普及活動を行ってきました。初年度は六百七十一名だった利用者も、現在ではプログラムの種類や数も増えて年間二十万人以上となっています。これからも静岡県立美術館実技室では、参加者が作品を身近に感じて、美術作品鑑賞自体が楽しくなるように、魅力的な教育普及活動を行っていききたいと思えます。



## 平成二十九年 新収蔵品・寄贈作品の紹介

静岡県立美術館は、開館以来、「東西の風景画」、「静岡ゆかりの美術」などを収集方針とし、コレクションを形成してきました。平成二十九年度は、ご寄贈いただいた七点と、購入した二点の、計九点を収蔵することができました。ここでは、新たにコレクションに加わった作品についてご紹介します。

日本洋画の新収蔵品は、河合新蔵《富士山》、小林清親《従箱根山中富嶽眺望》の二点を購入、小栗哲郎《夕陽》の一点を寄贈いただきました。すべて静岡の風景をモチーフとした作品で、当館コレクションに相応しい作品ばかりです。



図1 河合新蔵《富士山》



図2 小林清親《従箱根山中富嶽眺望》



図3 小栗哲郎《夕陽》

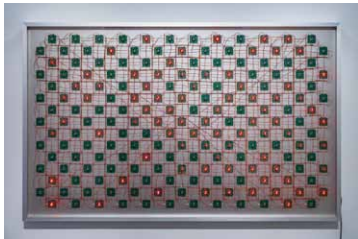


図4 宮島達男《Life (complex system) - no.1》

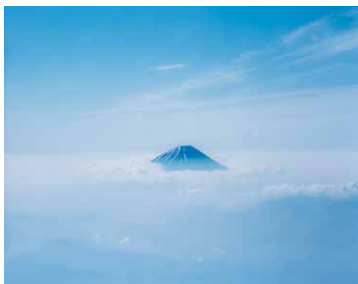


図5 石川直樹《Mt. Fuji #38》

で軽やかな筆致で描いたものです。前景に樹木を配し、画面中央には川面に樹木の影を映した一筋の川が流れています。画家が感興の趣くままに絵筆を走らせてはいますが、画面はしっかりと仕上げられており、風景画としての画格のある作品です。

小林清親《従箱根山中富嶽眺望》(図2)は、駕籠と歩行の二人の人物を前景に、雪化粧した富士を遠望した作品です。表題の下に「一月下旬午後三時写」とあるとおり、写生の時期と時間が記されており、太陽の光の調子が刻々と変化することを意識し、瞬間の光景を描写しようとした意欲作でもあります。小栗哲郎《夕陽》(図3)は、秋の夕暮を画題とした作品で、当時小

栗が下宿していた菊川付近の風景を描いたものと思われれます。田んぼの畦道の光と影を描き分けるなど、実景をよく観察しています。裏面のラベルから昭和九年に開催された第十二回春陽会展出品作であることが分かれます。

(上席学芸員 泰井良) 現代の作品では、ミクスト・メディア一点と、写真五点の計六点を寄贈いただきました。

最初に取り上げるのは、宮島達男による《Life (complex system) - no.1》(図4)です。宮島作品の背景には、一貫して三つのコンセプトがあります。すなわち、「それは変わり続ける」「それはあらゆるものと関係を結ぶ」「それは永遠に続く」です。本作ではLEDで表示される数字同士が、インタラクティブに反応し、二つ目に挙げたコンセプトが、

さらに明快に示されています。

次にご紹介するのは石川直樹の《Mt. Fuji #38》(図5)です。石川は、同名のシリーズにおいて、信仰や芸術の対象としての富士山を、自ら「登る山」として捉え直しています。当シリーズの中の五点についてご寄贈があり、本作はその一つとなります。本作は、上空から富士山を撮影したもので、周囲に抜がる雲を突き抜けています。(主任学芸員 植松篤)

平成二十九年 寄贈者様

(五十音順)

太田正樹様

辻韶彦様

貴重な作品をご寄贈くださいましたお二方には、心より御礼申し上げます。なお、これらの作品は「新収蔵品展」にて、ご覧いただくことができます。

新収蔵品展

七月十四日(土)～九月二日(日)  
関連イベント

学芸員によるフロアレクチャー

七月二十九日(日) 午後二時～

申込不要

# 作品介绍： フィラデルフィア美術館所蔵 ラファエル・コラン作《朝》

学芸課長 三谷理華

アメリカのフィラデルフィアに暮らし  
たジョン・G・ジョンソン (John Graver  
Johnson: 一八四一—一九一七) は、法  
律家として広く知られる一方、ルネサ  
ンス期のイタリアから十九世紀フランスに  
いたるまで、幅広い時代の美術品を収集  
したコレクターでもあった。そのコレク  
ションは一五〇〇点近くにもものぼった  
が、ジョンソンはこれをフィラデルフィ  
ア市に遺贈し、現在のフィラデルフィア  
美術館の収蔵品の基盤となった。同館で  
二〇一七年十一月から翌年二月まで開催  
された展覧会、「古き巨匠の今—ジョン  
ソン・コレクションを讀める (Old Mas-



図1 ラファエル・コラン作《朝》  
(フィラデルフィア美術館修復室にて2017年3月筆者撮影)

## 1. 基本情報、来歴、出 品歴

ラファエル・コランによる  
油彩画《朝》(仏語原題:  
*le Matin*)のサイズは一五  
〇・五×一四・〇cm。支持  
体は画布であり、大半のコ  
ラン作品にみられる画材商  
「アルディ・アラン (Hardy  
Alain)」のマークが画布裏  
に印字されている。署名と

「ers Now: Celebrating the Johnson Col-  
lection)」は、この稀代のコレクターの  
没後百年を記念し、ジョンソン・コレク  
ションに新たな光を当てる試みであつた  
が、そこには一点の見慣れない絵画が修  
復の上展示された。フランスの画家ラフ  
アエル・コラン (一八五〇—一九一六)  
の作品、《朝》(図1)がそれである。  
コランの《朝》は、フィラデルフィア  
美術館でも長く注目されていなかったよ  
うだ。近年は同館のインターネット上の  
データベースでも所蔵が確認できるが、

筆者が一九九九年に日本で開催のコラン  
回顧展準備のため問い合わせを行った折  
には、所蔵の回答を得ることはできな  
かつた。同館でジョンソン・コレクション  
の研究を進める中で、そこに含まれるコ  
ラン作品にも改めて目が向けられたのだ  
ろう。そして筆者は、作品修復作業開始  
直前の二〇一七年三月、この作品を実見  
し調査する機会を得た。したがって本稿  
では、この調査報告も兼ね、「再発見」  
したとも言えるコランの《朝》を紹介し、  
今後の考察の土台を示したい。

年紀は画面右下に「R. COLLIN 1884」  
とあり、一八八四年の作であることが判  
る。付属の額はオリジナルとみられ、額  
上部中央には「334」の番号が記され  
た貼紙がある。この貼紙は、後述するが、  
一八八九年のパリ万国博覧会の出品番号  
票と思われる。他にも額下部左隅に「2  
956」の番号を記した楕円形の小さな  
プレートが付されているが、こちらはフ  
ィラデルフィア美術館での所蔵品番号で  
ある。  
この作品に関し、フィラデルフィア美  
術館に次のようなコランの手稿が残され  
ている。(原文仏語、筆者訳)

「パリにて 一八八四年十月一日  
私がジョンソン氏のために制作した絵画作  
品、窓辺の若い女性への支払いとして、ドレ  
クセル・アージェス銀行の小切手四五〇〇フ  
ランを、ジョン・ジョンソン氏からのものと  
してA・ハリソン氏より頂戴しました。  
一八八四年十月一日  
R・コラン

ヴォジラール通り一五二番地  
ロンザン小路六番地 パリ」

この手稿により、《朝》はジョンソンの  
ために制作され、コレクターが直に買い  
上げたことが判る。文中に記載のある「ハ  
リソン」とは、主にフランスで活躍した  
アメリカ人画家、トマス・アレキサンダ  
ー・ハリソン (一八五三—一九三〇) で  
ある。ジョンソンと同じくフィラデルフ  
ィア出身のハリソンは、一時パリでジヨ  
ンソンの作品収集の手伝いをしていた。  
ジョンソンは一八九二年、自身のコレク  
ション目録を製作しているが、そこには  
目録番号四十番の《春》(英語原題:  
*Spring-Time*)としてこの作品は記載さ  
れている。そして一九一七年の遺贈の際  
にフィラデルフィア市に譲渡され、今日  
フィラデルフィア美術館所蔵品の一角を  
なすこととなった。  
ジョンソン個人のために制作された



図2 1889年8月24日付「ル・モンド・イ  
ュストレ (Le Monde Illustré)」紙124頁



図3 1889年5月14日付「シャリヴァリ (Le Charivari)」  
紙3頁掲載のドラメル作のカリカチュア



《朝》ではあるが、コラン存命中に公の場でも展覧の機会を得た。一八八九年サロンには出品番号六一一で、同年のパリ万国博覧会には出品番号三三四で展示されている。いずれも制作から五年後のことではあるが、万博の目録には「ジョンソン「ママ」氏所蔵 (Appartient à M. Johnston [sic])」と併記されており、一八八九年八月二十四日発行の「ル・モンド・イリュストレ」紙にも万博に出品されたコラン作品の図版(図2)として本作が掲載されている。またサロンの際にも、一八八九年五月十四日発行の『ジャリヴァリ』紙にカリカチュア(図3)が掲載されている。よって一八八九年のサロンと万博に出品されたのは、確かに本作と確認できる。フィラデルフィア美術館の記録によれば、《朝》は一八八五年四月から五月にかけてフィラデルフィア・ユニオン・リーグの展覧会にも出品されていた可能性がある。であるならば、本作は大西洋を再び渡って一八八九年のパリ万博やサロンに展示されたことになるのか。コランの自信作の一つだったのだろうか。

## 2. 画中に描かれた場所と展覧会時の反響について

コランはパリ郊外のフォントネー＝オ＝ローズにアトリエをもっていた。コランに師事した黒田清輝(一八六六一―一九二四)は、この建物の窓をめぐる次のように回想している。

「その窓のなかに軽い夏の服装をした美人が

立つて居て、窓の上には白い壺に、赤と白の混じったグラジオラスの切花の図などを描かれたことがあった。」

これは《朝》の描写と思われる。制作年の一八八四年は黒田の入門前なので、恐らく一八八九年のパリでの展示などで目した時の記憶だろう。この回想によれば、描かれているのはフォントネーのコランのアトリエの窓ということになるが、画家の縁者遺族の手元に残されるこのアトリエの前で撮ったと思しきコラン一家の写真(図4)と比べても、妥当なことかと思われる。ちなみにこの建物は現存しており、現在も画中の趣が残されている(図5)。

コランがフォントネーのアトリエを舞台に描いた《朝》は、一八八九年のパリでの展覧時にも概ね好評を博したようだ。サロン時の批評では、「コラン氏が窓際に見せている《朝》の若い女性も魅力的だ」であるとか、「多分、稀にみる繊細さと溢れる気品をもってモデリングされた肖像である」といった論評がみられる。また万博の展示に際しても、「この全く現代的な作品を生み出すことで、コラン氏は、田園の風情をたっぷりと含んだその筆を、博覧会の美術展会場まで榮譽とともに伴ってきた」と評されている。

以上、現在フィラデルフィア美術館所蔵のラファエル・コランの《朝》は、ジョンソンというコレクターのためにフォ



図4 フォントネー＝オ＝ローズのアトリエの庭【推定】でのコラン一家 撮影者・撮影年不明【1880年代か?】個人蔵(フランス)



図5 フォントネー＝オ＝ローズ市マリニエール通り3bis番地の家(筆者撮影。なお、私有地のため許可無く見学や撮影はできない。)

ントネーのアトリエを舞台に描いた作品ではあったが、公の場での展示の際にも好評を博すなど、画家の代表作の一つに数えられると思われる。展覧時の反響のさらなる検証や描かれたモチーフのより詳細な分析などを通じ、一層の考察に値すると考えられよう。

- 1 Philadelphia Museum of Art Archives.
- 2 *Catalogue of a Collection of Paintings belonging to John G. Johnson*, Philadelphia, November, 1892, p.15. この目録は図版を伴っていないが、文字で描写された画面内容やサイズから、《春》と《朝》は同一の作品であると判る。
- 3 *Salon de 1889 Catalogue illustré*, Paris, Ludovic Baschet, 1889, p.11.
- 4 *Exposition Universelle Internationale de 1889 a Paris. Catalogue General Officiel, Tome Premier, Groupe I, Œuvres d'Art, Classes I a 5*, Lille, Imprimerie L. Daniel, 1889, p.14.
- 5 Philadelphia Museum of Art Archives.
- 6 黒田清輝「コラン先生の追憶談」『美術新報』第十六巻第一号、一九一六年十二月、二二頁。
- 7 Etienne Junca, *La Peinture au Salon de 1889*, La Criticism, 25 mai 1889, p.2.
- 8 Félix Faucher, *Salon de 1889 VI Peinture Salle 10*, *L'Entr'acte*, 8 mai 1889, p.2.
- 9 Olivier Merson, *Beaux-Arts : le Matin, le Monde Illustré*, 24 août 1889, p.122.



本の窓  
今橋理子著  
『兔とかたちの日本文化』  
東京大学出版会 二〇一三年

キャラクターやペットとして、現代でもなじみ深い兔。本書では、江戸時代の花鳥画や動物画の研究で知られる著者が、日本文化における兔の造形化を三章にわたり論じます。第1章では古代中国に端を発する「月の兔」図像の歴史を詳述した上で、その知見により江戸時代の葛蛇玉《雪夜松兔梅鴉図屏風》に新たな解釈を与えます。鮮やかで緻密な論理の展開に、読者の多くが高揚感を覚えることでしょう。続く第2章で丹念な実地調査に基づき、和菓子に表された「伏せた丸い兔」のかたちの由来を説き、第3章では現代のうさぎグッズに散見される「花うさぎ」文様が、実は十九世紀末以降に新たに創造された「擬古典」であることを明らかにします。多分野を横断することで、「かわいい」だけではない兔の造形化の豊饒なる歴史を紐解く、知的興奮に満ちた一冊です。ちなみに当館の人気作、円山応挙《木賊兔図》も取り上げられています。

(主任学芸員 浦澤倫太郎)

# これから何年、何十年先も

静岡県文化・観光部文化政策課 加茂貴星



県庁別館展望ロビーから見る日本平周辺

一昨年の四月から、私は県の文化政策課の職員として県立美術館に関わらせていただいています。美術館の運営に携わる人間としても、行政職員としてもひよっ子同然であった私にとって、これまでの二年間は「一から学び吸収することばかりでした。折しも着任した平成二十八年は開館三十周年という節目の年であり、年度当初の四月から記念式典や「東西の絶景」展等の催し物が続きました。こういった場に立ち会った

り、美術館を応援して下さる方々、館の職員の皆さんと接したりするなかで、館がこれまで蓄積してきた有形無形のもの、重みを感じてきました。

しかし、そういった積み重ねを今後も続けていくうえで、取り組まなければいけない課題があるというのも事実です。現在本館において行っている工事もまた、良好な環境のなかで作品を展示するという美術館の機能を守るためのものです。私は美術館を担当することとなった時、「この先何年も、何十年も残るものに関わることが出来る」とやりがいを感じました。しかし実際は自然と「残る」ものではなく、様々な立場の人間が力を合わせて「残していく」ものであると、日々仕事として美術館を見つめるにつれ認識が変わりました。

今年一月、私の担当する中学生向けの芸術鑑賞事業に参加した生徒たちが県立美術館を訪れました。鑑賞後の感想を記入したアンケートには、日常生活でなかなか出会うことのなかった美術館という場に対しての新鮮な感情がこぼれ出ていました。彼女たちがこれから何十年先も、折に触れてこの場を訪れ、その度に新しい感動を抱くことができるように。私も自分の仕事に向き合っていきたいと思います。

## 利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)  
休館日：毎週月曜日(月曜祝日の場合は開館、翌火曜日休館)  
7月1日(日)～7月13日(金)

## アクセス

- ◎JR「草薙駅」県大・美術館口から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡I.C.、清水I.C.から約25分
- ◎新東名高速道路 新静岡I.C.から約25分

テレフォン・サービス：054-262-3737  
ウェブサイト：<http://www.spmoa.shizuoka.shizuoka.jp>

無料託児サービス(本館工事休館中は休み)  
毎週日曜日および祝日10:30～15:30  
対象 6ヶ月～小学校就学前

※イベント等は都合により変更になる場合があります。

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2  
総務課/Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767  
学芸課/Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742



## 静岡県立美術館

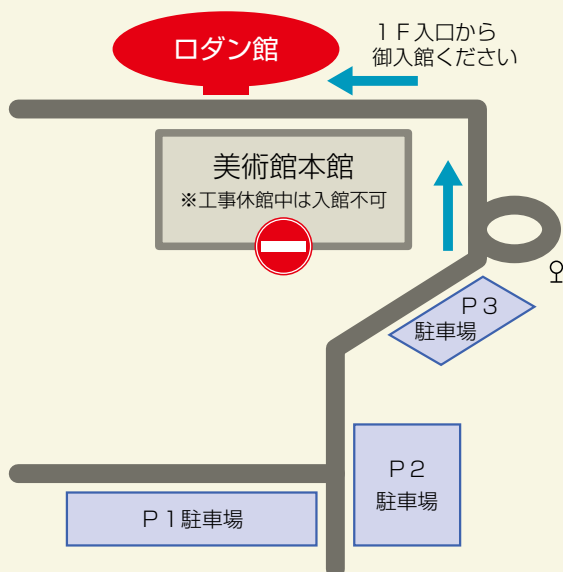
Shizuoka Prefectural Museum of Art

つながる、次へ

## お知らせ

平成30年3月1日(木)から7月13日(金)まで(予定) 県立美術館本館は改修のため休館となります。

なお、ロダン館に限り本館休館中も6月30日(土)まで開館しておりますので、期間中に御来館される方は、下図のとおり本館右手から奥にお進みいただき、ロダン館1Fから御入館ください。



友の会のご案内 入会は常時受け付けています。会員特典など詳細は、友の会事務局(Tel.054-264-0897)にお問い合わせください。